

にあんがくつついています。」という。坊さんは「なるほど仏さまがくつたかな。それなら仏さまをいじめてたたいてみよう。」とかねのばちでたいたいたら「くわん、くわん」となつたんだとお。「それみる、仏さまは食わんでないか。」と詰問したら、小僧はまけていず「おしよさま、それではわたしが釜で煮てみましょう。」と仏さまを煮たら「くつた、くつた」とにえたぎる音がして、「おしよさま仏さまは食つたといわれます。」というのに坊さんは返す言葉がなかつたとお。

とんち小僧のはなし ㊦

むかし、あるお寺に坊さんと小僧がおつたんだとお。ところが坊さんは「小僧、朝が早いからお前は早く寝ろ。」と小僧を寝かして、眠つたあとに庫裏でこっそりだん家であげたもちを灰のなかにくべて焼いては食つていたんだとお。いつか小僧はこの坊さんの隠しごとをかぎつけ、何とか自分も食つてみたいと思つて、いろいろ知恵をしばつたんだとお。幸い今日はだん家の新しい家をつくる建前によべたので、一つこのことを話してもちにありつこうと坊さんがもちをくべて焼けたころ起きてきて「おしよさま言い忘れたことがありました。今日は建前によべられていって、こんな大きな柱をたてました。」と、そういつて火ばしでもちのある灰の上をつつついたんだとお。そうしたら火ばしといっしよに、まるくおいしいもちがもち上つた「小僧、とうとう見つけたか。夜食にお前もたべるがいい。」と小僧にわけまえをわけてくれたんだとお。

とんち小僧のはなし ㊧

むかし、ある寺に坊さんと小僧三人がいたんだとお。坊さんは夜になると「小僧ども朝早いから早く寝ろよ。」と寝かせたあと毎晩のように庫裏の囲炉裏でだん家であげたもちを焼いて、コッソリ食べていたんだとお。